



中村俊定文庫
文庫 18
194



雪白何下

芭蕉翁卅三回諱 題各時雨



於これ多路中の松の時ゆきり 魯九

時鐘秋涼し〜と可白あり 李又

文もも皆〜まね〜まき 平都婆 竹下

ち〜〜と日とも家の時ゆきり 和蕙

四五間も出村多〜 竹下 只白

あ〜川路〜流や〜せれはゆき 芦錐

小遺

雪搔巾豆腐買りもねおしる 南江

菘菜盆

冬吹雪持ぬれ一雪の庭 百

茶番

炭よりしし茶を一得の古者加減 白之

粥焚

后眠りおきしれ四考る粥の去 李々

味噌摺

物物此書ながらの 雲龍一 秋知

酒買

酒買りしきし通子さきさ小 芦錐

行灯

灯燈れ仰て定ふ所お小 燕雨

配膳

足りけしけがこりしきしきし 号天

硯箱

水入此袖味晴とらう重況 露立

文臺

ふさふさ新の雪より梅のふ 千峰

客人

床脇へお出されさう大坪の如 風草

あいに山のさうささるる雑多 坊

下略

巻一

るさきの水程とありとさきとあり 魯丸

山車と

さきとありとありとありとありとあり 全

丁未二月廿四日ハ夫々御師の
二十と四と云々依経本古高
け道とありとありとありとありとあり
得かきしりありとありとあり

梅雪を多升と松此同う 風草

細水流のあけかけ
魯九

小舟およ女蝶男蝶のおつきて
南江

其二

帯ねむのゆきと唐一踏雪居
芦籬

一やうんくもくを
魯九

赤雲の袖喜風吹おそく
山嵐七

其三

もくもくおひかくくは
燕雨

川をせあけく
魯九

まめ風移乃袖よちりて
和蕙

其四

桂さく道淋れに奥の院
十白

一把内せり
魯九

唇分守るまを
妹知

其五

首のゆれ産も
和蕙

うらうらあ申れは毫の餅草 魯九
氣の神ももつまのまゝとらうく 燕雨

其六

うらうらあ申れは毫の餅草 魯九
うらうらあ申れは毫の餅草 魯九
燕ももつまのまゝとらうく 魯九

其七

坂ころころあは照るあはうらうら 南江

うらうらあ申れは毫の餅草 魯九
うらうらあ申れは毫の餅草 魯九

其八

うらうらあ申れは毫の餅草 魯九
うらうらあ申れは毫の餅草 魯九
うらうらあ申れは毫の餅草 魯九

其九

うらうらあ申れは毫の餅草 魯九

つるまきしり紐子のあくあきく 魯九
水もりしり紐子の地り縄結く 千峰

其十

山吹の浪やワムられ栢根の井戸 殊知
海軍のちり波さくく 魯九
ふしと水い日水の波さくく 只白

其十一

海軍のちり波さくく 千峰

あきりきくぬ海化きく 魯九
ぬい物波村目さくく 露丘

其十二

むらりぬさくくさくく 嵐七
よきりりあきをたぎに丁重 魯九
あきりぬさくくさくく 風外

其十三

あきりぬさくくさくく 魯九

二月十四日

卯の

とんちんてホロ武者一騎鹿ん 三天

号仙

山吹色あは流くもま 地りけ 乙由

糸流くもまもま 魯九

中宿ありもまのまをまのま 崖虎

餅くも時を餅くも餅くも 茂秋

揚定れ尺見れ月を定れ 曾北

余はから徳のまはまのま 春波

書文入るり姉ままのま 加丁

まのまのまのま 由

まのまのまのま 九

まのまのまのま 虎

ぬくまのまのまのま 秋

南宮まのまのま 北

まのまのまのまのま 彼

一丁海崎の春をけり 九

秋中へ新水が斗初ぬあり 由

ろくろの別を起す教諭 九

いのもよ神をけりやあは 虎

楊屋をたをれと町中のふ 秋

そいつを孫生らるれあま 北

猪のそれうけくうを 波

近能後部のみんを取遣へ 丁

やあなううをきり 九 由

門あとゆくとくれも新うたう 九

何連介のみを部云年 虎

洲沼下すてまけけうるひて 秋

女房神今を起すを所 北

蝶掃とまかみけあゆすて 波

一寸海の雪をふぬく 鳥

之種くゆく矢信をきくて留の月 由

淋りりきる 叔 白 汝 分 九

淋りさハ 稀 赤く 枯 の 凡 虎

裾 の まこと 隠す 手 中 秋

と 澄りし 紅く ぬい 隅 の 傍 北

側 まで 又 春 の 芳 の とき 以 彼

ふも 今 雪 白 河 と 吹 折 れ 玉 丁

雪 結 氷 あり と 流 とも なる 九

哥仙

昔の 也 石 の 稀 ち ら 好 り 風 州

遠 今 一 年 池 の 叔 後 魯 晃

中 有 唱 字 向 ぬ 糸 結 ぎ 李 夏

以 城 下 上 ころ 城 下 あり 十 知

危 重 室 の 了 多 子 月 心 の 智 南 江

れ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 和 蕙

草 吹 く 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 露 五

つきのまはるは遊ばさる
とほくは海よりむけのあはれ
親文あまの母の神田
まきれわの船の花は
よけて好まはるる月
まはるはあはれはるる
まはるはあはれはるる
浮名まはるはあはれはるる
七

下千

まはるはあはれはるる
大ねはまはるはあはれはるる
ゆきの中まはるはあはれはるる
凡中あはれはるる
念昔のあはれはるる
まはるはあはれはるる
あはれはるる
あはれはるる

上

下

ふのきりらあきと海判
ふ海若きあはれふふあが
あれうあれハハ拂ま
しりあ月あるのあひ
あ海若きあはれふふあが
あはれうあれハハ拂ま
しりあ月あるのあひ
あ海若きあはれふふあが
あれうあれハハ拂ま
しりあ月あるのあひ
あ海若きあはれふふあが

芭ハ何ヤとえはいふりも
昔昔の昔昔の昔昔の昔
御をたは癒の八百九
ああああああああああ
詩りああああああああ

交仙

給あはれあはれあはれあはれ
巴静

新編のつらさの空の空の空 魚丸

舟合のころの例のつらさの空の空 昇角

女子の抱て居る青 比誰

表の裏つとぬるさの月 以之

誰か一畑ころの空の空 左把

出さる此月ころの空の空 來士

空の空の空の空の空 静

吹流の舟合空乃ぬるる 九

千の空の空の空の空 角

抑さるる空の空の空 誰

持備の空の空の空 之

新編の空の空の空 把

空の空の空の空 士

福の空の空の空の空 静

村の空の空の空の空 九

空の空の空の空の空 角

新編

千柳を掃めのそいでハリ 誰
食喰いぬるも臥して暮下り 之
け柳をハ余程もらん 把
ほつと去れしははも余事 士
くわひさうて風を度守 静
若ぬけのちるき神まあり端 九
柳ももの貴き後、まはぬ 角
ほろほろとまぬあつたもよ 誰

之柳を掃めのそいでハリ 誰
食喰いぬるも臥して暮下り 之
け柳をハ余程もらん 把
ほつと去れしははも余事 士
くわひさうて風を度守 静
若ぬけのちるき神まあり端 九
柳ももの貴き後、まはぬ 角
ほろほろとまぬあつたもよ 誰

萬葉

巻

新編とくもちのり
獲私うもつと改ねむり
ふりしは思ふたはあり
筆

号記

廿一
日記とあつて書友社の係
旅のまはりの場
知角

詠乃た元うすくさるり
今月のまもあつても
淋しい事と席あつて
望む程のぼつちら
首とてあつて
定らぬ言やと飯の糞
新し延まう侍あり
一滴れとと膝
素然
山紫
観水
此草
小春
曾及
大志

例系此津も恋すきつは隣
美くはく松の月と西下り
操ぬ事も出くつる子大将
去程千袷不締の以ちきこ
暗簾結結く這ふ百三
海草のあま海苔のなをりて
あゝ風の波岸の繁ふ路く
常もあふれきふ途ふあや
草 水 靴 然 青 角 九 隣

あらへ海くこのあけの春
凌方のあひと軒くくはげ
あふと作く親ちりる如
鶴四割ひこむれよく
宿入る春白もさきのあま
あうくくねむ出れはえさ
月をるれくさきの跡
試く清とほくれ中を酌
青 角 九 鄰 志 及 春

第...

第...

隠居其後幾多今も好り袖
打ぬり傘借くもふの
心をて信さ曾我の
一日の陸より獄の全れ蓋
河豚を本是すし物と
神風和陸よれはれぬ
余所より深きし紅
さうれうふうと牛れ
九

辰の辰重録その是角

辛巳

垣向えの極ありとやられ
ぬらぬら月をさるる
献きやゆぬを足す
海平川の海へ流る
徳也の流を帯と
二川
魯丸
白推
有節
一曲

御師殿の曆よりまらも年のころ
 一庸
 春のよきしり物もやぬ舞盤川
 糸のるまら山あらし町よ青きく
 九
 ちう合井戸張侍よけ立
 推
 桐のしあめ所りれ流き流き川
 節
 物ほしきあも流きくさ的
 由
 新若きまらく木房れき味掛の上
 菊

宗祇のよまもらうあき重徳
 庸
 まおれ省中ひあきあらしの
 川
 流き出たれても廊きまらぬ
 九
 夜まらきまら小袖もむれあ
 推
 使も極よくらしきまら
 節
 京の元八田畑もらうそり
 由
 揚貴妃うらう柳凡品とハ
 菊
 ちう流きくまらあきあらしのあらし
 庸

娘の縁あり傳の欄干川
身代き難波の藤のふり吟九
踏まき古いとるふ神丁推
我う恋入あのみあふ十之夜節
そあとも人地侍くこ林由
湛くと川水の湯と大盥菊
瓦平一柳のくまひ白雨庸
星留くはりあそとてと又ら唐川

はゆて居る梅の赤貝九
道成寺の北向の南風推
吐盡り酒飲あはれと共京節
こころと合灯あはれより由
誰うかきくあつ下結の青菊
やましくとるあはれとる松まつと世庸
形影えしあはれとるまよし
執筆

哥仙

ちかおらとあうと

教れえとそそ母もいふやのまの旨 傳彦

あの子れ作まうり歌やうし 魯九

内漢中々嘘とてまう物言りて 巴湫

あつてまのれとほまじり弁郎 拾丁

暗るる然とていふもあま月のを 松宇

あまの御して丁も強念 柗雨

あむも穠もあうと分を清けしむ 蟠此

家のらうとていふもまうし 彦

清うとあ乃清子と柳けしあ 九

さうはまことあうとあハ文歌 湫

化物を清け月の中鳥帽子 丁

あつて格うと格うと近ら 宇

まをすこと今うねもあうとあ茶 雨

あまの中あれもあまの場とあ 地

借りては子法はとある
深凡名ありては味縁
日のさぬる一とありて
とつては啼と音の音
唐よりも字を借る昔山寺
根同ひの祀文とす移て
川移乃ぬとてなり解す
位碑田地とてありて
九 彦 丁 宇 雨 此 彦

教訓と聲も其身と因らぬ
別と物を別らして
昔法中とて所ははるま
振ると音の味と嫁と云
茶室に於てはとある
踊りもゆかりありて
紅衣とあるとて
九 彦 丁 宇 雨 此 彦

新ふふふの月ふるをさきさきとて 淋
かこふふの月ふるをさきさきとて 丁
かこふふの月ふるをさきさきとて 宇
かこふふの月ふるをさきさきとて 面
かこふふの月ふるをさきさきとて 此
かこふふの月ふるをさきさきとて 執筆

分海

送下よの月ふるをさきさきとて 吳天
かこふふの月ふるをさきさきとて 魯九
かこふふの月ふるをさきさきとて 只白
かこふふの月ふるをさきさきとて 千峰
かこふふの月ふるをさきさきとて 芦錐
かこふふの月ふるをさきさきとて 燕雨
かこふふの月ふるをさきさきとて 嵐

あまの山をみながらよふ天

よしあまの山の麓にまきぬきり九

きりぬきぬきぬきぬきぬきぬき白

流りぬきぬきの流りぬきぬきぬき白

野井の流りぬきぬきぬきぬき錐

兼きぬきの流りぬきぬきぬき雨

肌むこいぬきぬきぬきぬき七

すくぬきぬきぬきぬきぬき天

あつたぬきぬきぬきぬき九

あまの山をみながらよふ白

よしあまの山の麓にまきぬき錐

きりぬきぬきの流りぬきぬき錐

流りぬきぬきの流りぬきぬき雨

野井の流りぬきぬきぬきぬき七

兼きぬきの流りぬきぬきぬき天

肌むこいぬきぬきぬきぬき九

ぬき乃そく物の執うく
卯もみ竹いさハツくあ
白壁町の押路き麓
いさうもころと馬の付廻り
澄つてくさるゆの空
松林りし草もいさる花
波冷しき溪の流 澄
いとつたにへカコウの都その中
白

朱林多井のうへく
杉あつひははあまあまの
甚何り夜いめくさる
くさる名所もむのもろく
柳の枝より風一列
峰
錐
雨
九
筆

京寺町押小路

檜屋治兵衛叔

